

## 『集史』の構成における「オグズ・カン説話」の意味

宇 野 伸 浩

はじめに

1. 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」の諸部族の分類體系
    - (1) 「モンゴル」という概念の擴大
    - (2) 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」の遊牧諸部族の分類
  2. 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」にみられる廣義の「トルコ」
  3. 13-14世紀のペルシア語史料における「トルコ」と「モンゴル」
  4. イスラム世界史に位置付けられたモンゴル
    - (1) イスラム世界史におけるトルコとモンゴルの系譜
    - (2) 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」における「オグズ・カン説話」の役割
  5. イスラム化しなかったモンゴルとガザン・カンのイスラム化
- ま と め

はじめに

イルカン國のガザン・カンが、ラシード・ウッディーン Rashīd al-Dīn Faḍl-allāh Hamadānī に編纂を命じ、ガザンの死後完成しオルジェイト・カンに獻呈された『集史 *Jāmi' al-Tawārīkh*』は、周知のように、イルカン國のみならずモンゴル諸ウルスの歴史を研究する上で最も重要な史料の一つである。その『集史』の第1巻「モンゴル史」には、冒頭の序文に續いて「オグズ・カン説話」が登場する。この『集史』の「オグズ・カン説話」は、本田實信氏が日本語譯を附して紹介したことにより、日本の研究者にはよく知られている<sup>(1)</sup>。

(1) 本田・小山 1974。近年では北川誠一氏が、諸史料に現れる「オグズ・カン説話」を紹介された(北川 1997, pp. 390-442)。北川氏は、筆者の發表要旨(宇野 1994)にもとづき、『集史』「トルコ・モンゴル部族史」の諸部族の分類などについて言及している。渡部 2001 は、イラン歴史敘述の觀點から論じたものである。

この説話は、トルコ系遊牧民のイスラム化を、オグズ・カンという人物に託して説話化したものであり、本田氏が述べるように、この説話に登場するオグズ・カンは實在の人物ではなく、「オグズ」とはもともとトルコ系の遊牧民の一部族の名称であり、「モンゴル時代前後からオグズ族の実像が薄れてくると、オグズという部族名を擬人化したオグズ=カガンという説話乃至は英雄叙事詩が発生した」のである<sup>(2)</sup>。従って、この「オグズ・カン説話」には、史實を明らかにするという点での史的価値はない。しかし、この「オグズ・カン説話」には、『集史』第1巻「モンゴル史」の構成上、あるいは第1巻「モンゴル史」の第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」の構成上、重要な意味が與えられていると筆者は考えており、ラシードがどのような意圖で第1巻「モンゴル史」を編纂したかを分析する上で、重要な材料を提供していると思う<sup>(3)</sup>。

以上のような問題意識に立ち、拙稿では、まず、「オグズ・カン説話」が、第1巻「モンゴル史」の第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」の構成上、どのような意味を持つかを明らかにし、ついで、「オグズ・カン説話」が、第1巻「モンゴル史」全体の構成上、どのような意味を持つかを明らかにしたい<sup>(4)</sup>。

(2) 本田・小山 1974, p. 19.

(3) この第1巻「モンゴル史」のもとになったのは、ガザン・カンが編纂を命じ、即位直後のオルジェイト・カンに獻呈された『ガザンの祝福された歴史 *Tārīkh-i Mubārak-i Ghazāni*』であるが、近年、志茂碩敏・志茂智子兩氏は、『ガザンの祝福された歴史』の眞の著者・編者は、ラシードではなくガザン・カン自身であり、イスタンブル寫本 (Rashīd/Rewan köşkü 1518) がその原型をもっともよくとどめているという議論を展開されている (志茂智子 1995; SHIMO 1996; 志茂碩敏 1997, pp. 255-262)。イスタンブル本が『ガザンの祝福された歴史』をもっともよく反映した寫本であり、それから部族編などの一部が削除され、その削除版『集史』第1巻「モンゴル史」を書寫して作成されたのがテヘラン寫本 (Rashīd/Majlis 2294) などの寫本であるとする。一方、白岩一彦氏は、『ガザンの祝福された歴史』に近いのはむしろテヘラン寫本であり、その後部族編などに増補が行われて作成された増補版『集史』第1巻「モンゴル史」を書寫したのがイスタンブル寫本であるとする。筆者は、増補された結果がイスタンブル寫本の内容であるとする白岩氏の主張は正しいと思う (白岩 1993; 白岩 1997; 白岩 1998)。これについては、増補のプロセスを含めて別稿で論じたので参照していただきたい (宇野 2002)。

(4) 拙稿の内容は、「イスラムの歴史に組み込まれたモンゴル」(早稲田大學東洋史懇話會, 1992年12月), 「『集史』にみられるトルコとモンゴル」(國立民族學博物館共同研究會, 1996年2月)として口頭発表し、前者の要旨は、宇野 1994として活字化した。拙稿は、それらをもとに加筆訂正したものである。

## 1. 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」の諸部族の分類體系

### (1) 「モンゴル」という概念の擴大

「オグズ・カン説話」が、『集史』第1巻「モンゴル史」の第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」の構成上どのような意味を持つかという問題は、「トルコ・モンゴル諸部族史」の諸部族の分類體系と深いかかわりがある。そこで、まず、「トルコ・モンゴル諸部族史」がどのような分類體系にもとづいて書かれているか、その分類體系において「モンゴル」「トルコ」という集團名がどのような範疇をさすかという問題を整理しておきたい。

「モンゴル・イルゲン (Mongyul irgen)」という名稱は、もともと、キヤト (チンギス・カン一族)、タイチウト、コンギラトなどのモンゴル高原東北部に居住する諸集團を包括する名稱にすぎなかった。しかし、杉山正明氏が指摘するように、チンギス・カンがモンゴル高原全體の遊牧諸部族を統一し、1206年にモンゴル・ウルス (Mongyul ulus) を建國すると、様々な遊牧諸部族が、自分もモンゴルであると名乗り始め、「モンゴル」という概念は擴大していったのである<sup>(5)</sup>。(史料1)によれば、ラシードが『集史』を執筆した当時(14世紀初頭)、「モンゴル」と自稱する人々の中には、キヤト、タイチウト、コンギラトなど本来のモンゴル部族以外に、ジャライル、タタル、オングト、ナイマンなどの諸部族も含まれるようになっていたことがわかる。

(史料1) 「現在、チンギス・カン(Chrinktz Khan)と彼の子孫が權力を握

(5) 杉山 1992, pp. 81; 杉山 1997, pp. 294-301. 杉山 1997, p. 295 では「氏族」さえも「血縁もしくは假構された擬似血縁で結ばれた小規模な集團」であり、純粋な血縁集團ではない可能性が指摘されている。その1例は次に挙げるタイチウトの場合である。「モンゴル人の歴史の何冊かに次のように記されている「タイチウト族は、ナチンという名のドトン・メネンの2番目の息子から生まれ枝分かれした」と。カンたちの寶庫にいつも大アミールの手で保管されているアルタン・デフテルというと同じ本を調査すると、次のことが明確に書かれている「タイチウトはカイドウ・カンの息子のチャラカ・リンクムから生じた」と。どこにもナチンの子供たちの記述はなく、「彼は、自分のいとこのカイドウをジャライルから守り、彼とともに外に出て、オノン河を居住地とした」とあるほどである。従って、本文の話が本當に正しいのである。タイチウト族は数が多かったので、ナチンの子孫は、彼らと混ざってその名稱を手に入れた可能性がある。」(Rashid/Alf-zade1, pp. 480-482)

り、彼らがモンゴル(Mughul)であるため、ジャライル(Jalair), タタル(Tatar), オイラト(Ūirat), オンクト(Ūnkut), ケレイト(Kerait), ナイマン(Naiman), タングト(Tankqut)などの他のトルコ諸族(aqwam-i Atrak)は、定まった名稱・固有の通稱を持っていたのに、皆、誇示するために自分をモンゴルと呼んでいる。彼らは、昔はこの名稱を拒んでいたにもかかわらず、現在いる彼らの子孫は、昔からずっとモンゴルという名であったと思っているが、そうではない。なぜなら、昔は、遊牧民のトルコ諸族全體の中で、モンゴルは一部族に過ぎなかったからである。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zade1, pp.162-163)

## (2) 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」の遊牧諸部族の分類

このように「モンゴル」という概念が變化していった状況の中で、ガザン・カンは、各部族の有力者の子孫が、自分たちの系譜や先祖の名稱をもはや知らないこと、遊牧諸部族の歴史上の重要事件を忘れていることをなげき、ラシードに調査とモンゴル史の執筆を命じた。

調査方法としては、イルカン國の寶庫に保管された歴史書や各部族出身のアーミールたち、側近たちの手元にある歴史書の一部を調査すること、記載が簡潔すぎる場合は、各部族出身の學者・識者に聞き取り調査することをラシードに命じた<sup>(6)</sup>。ラシードは、このような方法によって、遊牧諸部族の各部族の系譜を一つ一つ調査し、その調査結果にもとづいてできるだけ正確にトルコ・モンゴル系遊牧諸部族を分類し記述したと考えられる。その分類の骨子を要約したものが(史料2)である。(史料2)の中の記號[1a][1b][2a][2b][3][a][b]は、分かりやすくするために筆者が挿入した。それを整理してまとめたものが表1である。

(史料2)「[1a]その部族全體を現在トルコマン(Turkman)と呼んでいるオグズ(Ūghuz)。[1b]キプチャク(Qibjaq), カルチ(Qalj), カンクリ(Qanqlr), カルルク(Qarluq), および彼らと関係のあるその他の枝が枝分かれしている。[2a]現在、モンゴル(Mughul)として知られているジャラ

(6) 志茂 1995, pp.3-6.

イル(Jalair), タタル(Tatar), オイラト(Üirat), メルキト(Merkit), その他の諸部族。[2b]モンゴルに似ており, 各々が王を持っているケレイト(Kerai), ナイマン(Naiman), オングト(Üngüt)および彼らと同類の他の若干の諸部族。[3]昔から現在までこのモンゴル(Mughul)という名で知られている諸分族, すなわち, [a]彼らをすべてダルレキン(Darlekün)のモンゴルと呼んでいるコンギラト(Qunqrat), コルラス(Qurlas), イキラス(Yikras), イルジキン(Yiljikin), ウリヤンカト(Üryankat)などと, [b]特別なモンゴルであるニルン(Nirun)諸分族。』『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashid/Alī-zādeh, pp.75-76)

表1 ラシードのトルコ族の分類

[1a]オグズ族 ラシードの時代にトルコマンと呼んでいた(イスラム化したトルコ系遊牧諸部族)
[1b]キプチャク, カルチ, カンクリ, カルルクなど(イスラム世界周辺のトルコ系遊牧諸部族, 古くからイスラム世界に知られていた部族が多い)
[2a]ラシードの時代にモンゴルと呼ばれていた諸部族 ジャライル, タタル, オイラト, メルキトなど(モンゴル系遊牧諸部族)
[2b]モンゴルに似ている諸部族 ケレイト, ナイマン, オングトなど(非モンゴル系遊牧諸部族)
[3]昔からの本来のモンゴル(モンゴル部族)
[a]ダルレキン諸分族: コンギラト, イキラス, イルジギン, ウリヤンカトなど (チンギス・カンと系譜関係のないモンゴル部族内の分族)
[b]ニルン諸分族(アラン・コアの子孫, チンギス・カンと系譜関係があるモンゴル部族内の分族)

表1のカッコ内の記載は, ラシードの分類についてその基準を筆者なりに解釈したものである。このように解釈すれば, ラシードの分類はほぼ妥当な分類と考えられる。村上正二氏も, ラシードの分類について, 表現は曖昧な部分もあることは指摘しつつも, 分類自体は当時の実情を反映しているとした<sup>(7)</sup>。

ただ, ケレイトについては考察が必要であろう。なぜなら, モンゴル系でありネストリウス派キリスト教などのトルコ系の文化を早くから受容したとされ

(7) 村上 1960, pp.121-123.

ているケレイトを、ラシードがナイマン、オングトというトルコ系の部族とともに「[2b]モンゴルに似ている諸部族」に分類しているからである。彼らについて(史料2)には「モンゴルに似ており」と書かれているが、その意味については、「トルコ・モンゴル諸部族史」の別の個所に、

(史料3)「第3章 彼らもまたそれぞれ別々に王やリーダーを持っているトルコ人の諸部族について。しかし、彼らは、前章で述べたトルコ諸部族(=[2a]ラシードの時代にモンゴルと呼ばれていた諸部族)やモンゴル諸部族(=[3]本来のモンゴル)と親族関係・姻戚関係はあまりないが、容貌や言語が彼らに近い。ただし、前章で述べた諸部族は、お互いの間でも近年は親族関係・姻戚関係がなかった。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashid/Alf-zade1, p. 249)

とあるので、ケレイト、ナイマン、オングトは、「[2a]ラシードの時代にモンゴルと呼ばれていた諸部族」(ジャライル、タタル、オイラト、メルキト)と、「[3]本来のモンゴル」([a]ダルレキン諸分族、[b]ニルン諸分族)に、容貌や言語が「近い」という意味で「似ている」のであることがわかる。ラシードの記事を文字通りに解せば、ケレイトがトルコ系であったことになるが、おそらく、ネストリウス派キリスト教とウイグル文字を早くから取り入れるなど、ケレイトがトルコ系遊牧部族の文化の影響を強く受けていたために、ナイマンやオングトと同じグループに分類されているのであろう<sup>(8)</sup>。

## 2. 『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」にみられる廣義の「トルコ」

ラシードの分類は、村上氏が当時の実情を反映しているとみなしたように、ほぼ妥当なものと考えられるが、その一方で我々を困惑させるのは、表1に分類された遊牧諸部族全體が「トルコ」であるとされ、「トルコ」が「モンゴル」も含む非常に廣い概念として使用されていることである。ドーソンは『モンゴル帝國史』の中で、「トルコ族の名稱の下に、體質言語の點で嚴密な意味でのトルコ族とは異なる遊牧民族をも混同している」とラシードを批判し、譯注者

(8) 長田 1952, p. 51 (長田 2001, p. 167); 坂本 1970, pp. 106-107, 註10, 村上 1960, pp. 138-143, 146; 村上 1972, pp. 30-34, 註2; 森安 2000 (口頭発表)。

の佐口透氏も「ラシード・ウツ・ディーンは十三、四世紀のトルコ・モンゴル遊牧民集團を大きく四つに分類しているが、その分類法は厳密なものではない」としている<sup>(9)</sup>。

では、ラシードが実際に「トルコ」をどのような文脈で用いているかをみていきたい。次の**(史料4)**は「トルコ・モンゴル諸部族史」の序文のタイトルであるが、その後ろに遊牧諸部族を列挙した前掲**(史料2)**の記事がくるので、**(史料4)**の冒頭の「トルコ諸部族」というのは、表1の遊牧諸部族全體を指すことになり、「モンゴル」を含む廣義の「トルコ」の意味で使われていることがわかる。**(史料5)**では、「モンゴル」は「トルコ」の中の一つの種であると明確に述べながら、同じその文章の中で「トルコ」と「モンゴル」を並列させ、かつトルコとモンゴルの間には違いが多いという矛盾した言い方をしている。

**(史料4)** 「トルコ諸部族(aqwām-i Atrak)の土地のある地方、知られている限りの諸部族の各枝分かれの名稱と通稱の詳細について」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zadeh, p. 71)

**(史料5)** 「トルコとモンゴルのあらゆる部族・枝分かれは(hama aqwām wa shu'ab-i Turk wa Mughul)互いに似ており、(彼らが用いる)稱號は元來すべて同じであったけれども、モンゴルはトルコの中の一つの種(şinf)であり、彼らの間には多くの相違がある。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zadeh, p. 63)

さらに、ラシードは、次の『世界征服者の歴史』の記事**(史料6)**を、そのまま『集史』に引用している(Rashīd/Rawshan, vol. 1, p. 503)。その結果、その文脈では「トルコ」と「モンゴル」は別の集團として扱われており、廣義の「トルコ」の用法ではないことになる。

**(史料6)** (チンギス・カンがサマルカンドを攻略した後に)「城塞の中から全員が外に連れ出され、そこでトルコ人がタジク人から分離され、そしてすべてが、10人、100人のグループに分けられた。そして、彼らを落ちつかせ恐れをやわらげるために、トルコ人たち(Turkân)の頭の前部をモン

(9) ドーソン/佐口 1968, p. 307, 補注二, p. 311, 注一。

ゴル人たち(Mughulan)のように剃った。』『世界征服者の歴史』(Juwaynī/Qazwīnī, vol. 1, p. 95)

従って、ラシードは、モンゴルは「トルコ」の一種と明確に述べながらも、文脈によって「トルコ」の意味を使い分けており、「トルコ」がモンゴルを含む廣義の意味で使われることもあれば、モンゴルを含まない狭義の意味で使われることもあるのである。

### 3. 13-14世紀のペルシア語史料における「トルコ」と「モンゴル」

では、すでに言及したジュワイニー『世界征服者の歴史』も含めて、同時代の他のペルシア語史料は、「トルコ」と「モンゴル」をどのような意味で用いているのであろうか。

日本の研究者の中には、ラシードの用法を根據に、當時イスラム世界ではモンゴル系もトルコ系も遊牧民はすべて「トルコ」とみなされていたとする見解もみられる<sup>(10)</sup>。しかし、『集史』以外の歴史書の記述も合わせて考えると、状況はもう少し複雑であるように思う。東方から突如現れたモンゴルを、どのように位置付けるかについては、当時の歴史書にもさまざまな捉え方があり、モンゴルをトルコに含める廣義の「トルコ」が一般的であったとは必ずしもいえない。この点について、個々の歴史書ごとに以下に分析してみたい。

①ジュワイニー (‘Alā al-Dīn ‘Aṭā-Malik Juwaynī) 『世界征服者の歴史 (Tārīkh-i Jahān-Gushā)』

1260年に完成したジュワイニー『世界征服者の歴史』は、前掲(史料6)のように、「トルコ」と「モンゴル」は異なる習俗を持つ別の集團として扱っており、これは廣義の「トルコ」の用法ではない。

②ジューズジャーニー (Minhaj b. Siraj Muhammad Juzjani) 『ナーシル史話 (Ṭabaqāt-i Nāṣiri)』

『ナーシル史話』は、『世界征服者の歴史』と同時期の1259-60年頃に、ジ

(10) 北川 1997, p. 396, 宮脇 1990, p. 288, 宮脇 1995, p. 68.

ューズジャーニーにより執筆されたが、その中に登場する次の逸話の中では、「モンゴル」と「トルコ」が別の集團として區別されている。

逸話：あるとき、トインと呼ばれるトルコ人の佛僧が、オゴデイ・カアンのもとにやってきて、夢にチンギス・カンが現れ、全ムスリムを殺害するように命じたとオゴデイに申し上げた。このトインに對して、オゴデイは最終的に次のように答えた。

(史料7)「オゴデイは、そのトインに顔を向けて言った「おまえはモンゴル語を知っているか、それともトルコ語を知っているか、あるいは両方の言語を知っているか?」と。その偶像教徒のトインが言った「私はトルコ語 (zaban-i Turkt) を知っているがモンゴル語 (zabān-i Mughult) は知りません」と。オゴデイは、重臣のモンゴル人たちに顔を向けた。彼らの血統は固有のモンゴルであった。オゴデイは言った「チンギス・カンは、モンゴル語以外、どんな言語も知らなかったことは、おまえたちもよく知っていることだ」と。皆うつむいて、いっしょに次のように言った「チンギス・カンはモンゴル語以外どんな言語も知りませんでした」と。オゴデイはそのトインに向いて言った「チンギス・カンはおまえにどの言語でその命令を出したのか? モンゴル語かあるいはトルコ語か? もしモンゴル語で言ったなら、おまえはモンゴル語を知らないのに、チンギス・カンが何を言っているかが、どうやっておまえに分かったのか? もしチンギス・カンがトルコ語で言ったなら、彼はトルコ語を知らないのに、なぜ命令を出せたのか? それによって對處できるような眞實の香りのする答えを言いなさい」と。』『ナーシル史話』(Juzjānī/Habībī, vol. 2, p. 157.)

この逸話の中では、モンゴル語(モンゴルの言語 zaban-i Mughult)とトルコ語(トルコの言語 zaban-i Turkt)が區別されており、「トルコの言語」の「トルコ」は、明らかに廣義の「トルコ」ではなく、モンゴルを含まない「トルコ」である。ところが、ジューズジャーニーは、『ナーシル史話』の別の個所で、

(史料8)「モンゴルのチンギス・カン——彼ニ呪イアレ——も、この年に興起した。全中國の國々、邊境、諸地域において、その災難、暴動、反亂が始まった。すべての書物に、この世の終末の最初の徴候は、トルコの興

起であると書いてある。』『ナースィル史話』(Juzjant/Habrbr, vol. 2, p. 98.)<sup>11)</sup>

とあり、ここでは、モンゴルのチンギス・カンの興起は、他の書物に書かれている「トルコ」の興起の延長線上で解釋されており、モンゴルもトルコの一つと見なしているように讀める。その點では、ラシードの廣義の「トルコ」の用法に近い。従って、ジューズジャーニーは、ラシードと同様に、文脈によって「トルコ」の意味を使い分けており、「トルコ」をモンゴルを含む廣義の意味にも、モンゴルを含まない狭義の意味にも用いているといえる。

③ ハムドッラー・ムスタウフィー Hamd-Allah Mustawfi Qazwīnī 『選史 *Tārīkh-i Guzīda*』

イルカン國で、『集史』完成後の1330年に編纂された『選史』は、『集史』を主要な典據としているが、モンゴルをトルコの一種とはみなさず、(史料9)にあるように、「トルコ」と「モンゴル」は別々の始祖を持つ異なる集團であり、その2人の始祖が互いに兄弟であるとしている<sup>12)</sup>。

(史料9)「彼ら(トルコとモンゴル)の源は、ヌーフ——彼ニ平安アレ——の息子のヤーフェスの子孫からである。モンゴル人たちはヤーフェスをアブルジャ・カン(Abulja Khan)と呼んでいる。彼の息子たちのうち、トゥルク(Turk)がトルコ人たちの始祖であり、マンスイーク(Mansik)がモンゴル人たちの始祖である。彼をモンゴル人たちはイト・バウク・カン(Īt Bauqu Khan)と呼んでいる。』『選史』(Mustawfi/Browne, vol. 1, p. 558; Mustawfi/Nawā'i, p. 562)

以上の諸史料の記述からみて、當時の東方イスラム世界の歴史家は、かなり以前から彼らの土地に繰り返し侵入してくるトルコ人と、最近突如侵入してきたモンゴル人とは、異なる言語を話し、異なる文化をもつ別の集團であることはおおそ理解していたが、同じ遊牧民である兩者には何らかの関係があると

11) 日本語譯するにあたり、アラビア語の部分については、學友醫王秀行氏にご教示いただいた。記して感謝の意を表したい。

12) 本田・小山 1974, p. 62. 左記の論文には、『選史』「オグズ・カン説話」の該當部分が日本語に譯されて紹介されている。

みなしていたのであろう。両者をどのように関係付けるかについては、各歴史家にそれぞれの見解があったのであり、ジューズジャーニーは、両者を漠然と結びつけ、ラシードは、モンゴルをトルコ的一种として明確に位置付け、ハムドッラー・ムスタウフィーは異なる種であるが共通の祖先から分かれたと考えたのである。

#### 4. イスラム世界史に位置付けられたモンゴル

##### (1) イスラム世界史におけるトルコとモンゴルの系譜

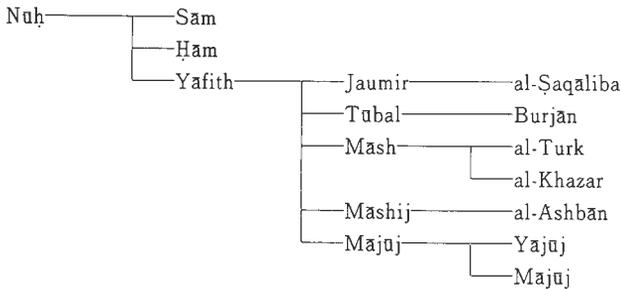
前章で論じたトルコとモンゴルをどのように関係付けるかという問題は、イスラム世界史におけるアダムに始まる諸民族の系譜に、モンゴルをどのように位置付けるかという問題と表裏一體の関係にある。ジュワイニーとジューズジャーニーは、諸民族の系譜にモンゴルを明確に位置付けることをしなかったが、ラシードは始めてモンゴルを系譜上に登場させた。ハムドッラー・ムスタウフィーは、そのラシードによる位置付けを訂正し異なる位置付けをしたのである。

そのことを説明するために、まず最初に、モンゴルが登場する以前のイスラム世界史において、トルコがどのように系譜に位置付けられていたかを主要な歴史書の記事に基づいて図示し、さらに『集史』と『選史』の系譜を図示しておきたい。なお、ここで取り上げる歴史書は網羅的なものではなく、あくまで『集史』の特徴を示すために必要な範囲で取り上げることにする。

##### ① ヤークービー Ya'qūbī 『歴史 Ta'rikh』

天地創造から872年までの世界史であるヤークービー（897年没）の『歴史』では、トルコ族の始祖 al-Turk が、ヤーフェスの子マーシュの子に位置付けられている (Ya'qūbī, pp. 15-16; 前嶋 1964, p. 68)<sup>43</sup>。

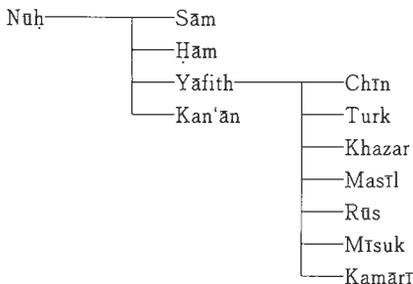
(43) ヤークービー『歴史』のアラビア語原文を参照するに際して、學友醫王秀行氏にお世話になった。記して感謝の意を表したい。



なお、同時代の歴史家タバリー al-Ṭabarī (923年没) の『諸預言者と諸王の歴史 *Ta'rikh al-rusul wa'l-mulūk*』では、これと異なり、ヤーフェスの子ティラスの子孫にトルコ人とハザル人が含まれている<sup>14</sup>。

### ②著者未詳『史話要説 *Mujmal al-Tawārikh wa'l-Qiṣaṣ*』

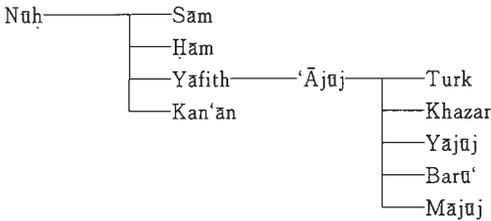
ガズナ朝において1126年に書かれた著者未詳『史話要説』においては、少し形を變え、トルコの始祖 Turk は、ヤーフェスの子として登場する（著者未詳/Bahār, pp.97-105, 184.）。



### ③ジューズジャーニー『ナースィル史話』

1259-60年頃に完成し、デリー・サルタナト政権の Naṣīr al-Dīn Maḥmūd Shah に獻呈された『ナースィル史話』には、トルコの始祖 Turk が、ヤーフェスの子アージュージの子として登場する。なお、『ナースィル史話』においてヤーフェスの子は18人いるが、下記の系圖では省略する（Jūzjānī/Habrbr,

<sup>14</sup> Ṭabarī/Brinner, p.16; 北川 1997, pp.399-400.

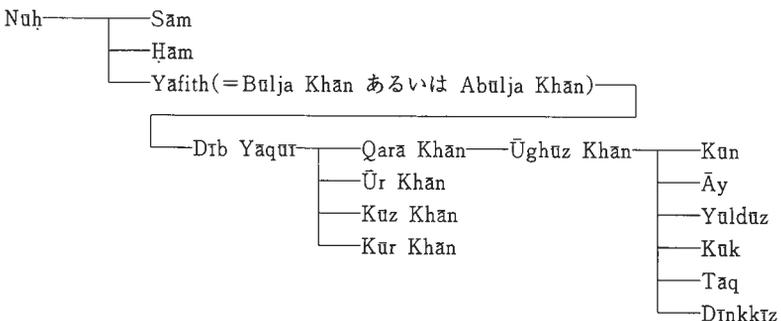
pp. 17-18.)<sup>15)</sup>。

## ④ラシード・ウッディーン『集史』

『集史』には、上記の歴史書と異なり、トルコの始祖 Turk は登場せず、その代わりにヤーフェスの子孫にオグズ・カンが登場する。ラシードは、

(史料10)「トルコ人はヤーフェスをブルジャ・カン（あるいはアブルジャ・カン）と呼んでいる。しかし、このブルジャ・カンがヌーフの子であるか、彼の孫であるかは、はっきり知られていない。」(Rashīd/Alī-zade1, p.90)

と述べている。ここでは、一應下記の系図のように、ブルジャ・カンはヌーフの子であり、ヤーフェスにあたるとしておく。後に詳述するが、ラシードは、オグズの父方の親族（叔父，兄弟，従兄弟）の子孫がモンゴルになったと考えた。すなわち、モンゴルは「トルコ」の中の枝分かれであり、トルコの一つであることが、系譜上跡づけられている。



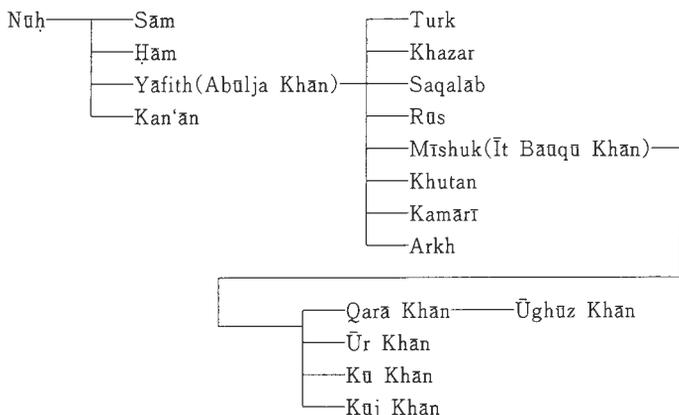
<sup>15)</sup> 『ナーシル史話』の Ḥabrīr による校定本を學友川口琢司氏から拜借した。記して感謝の意を表したい。

## ⑤ハムドッラー・ムスタウフィー『選史』

『選史』は、1330年に完成され、ラシードの長子ギヤース・ウッディーン・ムハンマドに獻呈された歴史書であるが、その『選史』には、ヤーフェスの子について、

(史料11)「彼(ヤーフェス)に8人の息子がいた。トゥルク(Turk), ハザル, サカラブ, ルース。ミーシュク(Mīshuk), モンゴル人は彼の子孫からであり, ヤージュージとマージュージも彼の子孫に数えられている。チーンとマーチーンはホタンの息子である。(後略)」(Mustawfi/Browne, p. 28; Mustawfi/Nawā'ī, p. 26)

とある。前掲の(史料9)に、「モンゴル人たちはヤーフェスをアブルジャ・カンと呼んでいる。彼の息子たちのうち、トゥルク(Turk)がトルコ人たちの始祖であり、マンスイーク(Mansūk)がモンゴル人たちの始祖である。彼をモンゴル人たちはイト・バウク・カンと呼んでいる」とあった。(史料11)のヤーフェスの第5子 Mīshuk と、(史料9)のモンゴル人の始祖 Mansūk とは同一人物の異表記であろう。下記の系圖には Mīshuk をあげておく。『選史』について注目される點は、『選史』は『集史』から「オグズ・カン説話」を取り込みながらも、『集史』のようにモンゴルをトルコ的一種だとはせず、オグズはモンゴル人であり、オグズの祖父ミーシュクがモンゴル人の始祖であり、その兄弟トゥルクがトルコ人の始祖であると記している點である。



ジュワイニー（『世界征服者の歴史』）とジュールジャーニー（『ナースイル史話』）は、アダムに始まる諸民族の系譜にモンゴルを位置付けることをしなかったが、それに對してラシードは、トルコ系・モンゴル系遊牧諸部族の系譜を調査することを命じられていたため、遊牧諸部族がイスラム世界史の諸民族の系譜にどのように繋がるかを明らかにせざるを得なかったと思われる。その際、「トルコ」はすでに諸民族の系譜上に位置付けられていたので、その「トルコ」に彼が調査したトルコ系・モンゴル系遊牧諸部族の系譜を結び付けることを考え、そのためには「モンゴル」は「トルコ」の一種であると定義することがもっとも容易な方法であったのであろう。

一方、ハムドッラー・ムスタウフィーは、『選史』を執筆する際に、多くの點では『集史』によりながらも、あえてトルコの始祖とモンゴルの始祖を別に立てるといふ異なる位置付け方をした。それは、上述の（史料6）（史料7）に見られるように、「トルコ語」と「モンゴル語」は別の言語であり、「トルコ人」と「モンゴル人」は異なる習俗・文化をもつ別の集團であるという捉え方が、すでに定着していたのであり、「モンゴル」を「トルコ」に含める廣義の「トルコ」の用法は、實際の人々の意識とずれていたためであろう。

## （2）『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」における「オグズ・カン説話」の役割

前節で述べたように、ラシードは、自らが調査したトルコ系・モンゴル系遊牧諸部族の系譜をイスラム世界史の諸民族の系譜に接續するために、「モンゴル」を「トルコ」の一種に位置付け、「トルコ」を廣義に定義をしたと思われるが、ラシードは、さらにもう一工夫した。それが「オグズ・カン説話」の『集史』への導入である。

この説話は、『集史』の中で第1巻第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」の序文・目次のすぐ後に出てくる。『集史』では、他の歴史書のようにトルコ族の始祖トゥルクが登場するのではなく、そのかわりに、ヤーフェスの子にディブ・ヤクイが現れ、その子がカラ・カンであり、カラ・カンの子としてオグズという人物が登場する（13頁の系圖参照）。ラシードは、オグズの祖父ディブ・

ヤクイの子孫全體がトルコ人になり、その中の一部にあたるオグズの叔父や親族の子孫がモンゴル人になったと考えた。ラシードによって、はじめてイスラム世界の諸民族の系譜にモンゴル人が位置付けられたことになる。

ここで、「オグズ・カン説話」の概略をまとめておきたい。

オグズは、ヤーフェスの子孫の一人カラ・カンの子として生まれたが、母親の乳を飲まず、母親の夢の中で「あなたが神を信じるならば乳を飲む」と言った。母親が、偶像教徒であった夫と一族には内緒で密かに神を信じると、その子は乳を飲んだ。その子は1歳になると、「オグズと名づけてください」と言い、周囲の人々を驚かせた。オグズが成年に達すると、父カラ・カンは自分の弟の娘をオグズに娶らせた。オグズは娘に「あなたが神を敬い愛するならばあなたを愛そう」と言い、それを拒否した娘を無視した。父カラ・カンは別の弟の娘をオグズに娶らせたが、同様にオグズはその娘を愛さなかった。カラ・カンはまた別の弟の娘を薦めた。その娘はオグズの要求に従い神を信じ、2人は結婚し愛し合った。オグズは一族の者と交際せず、絶えずアッラーと唱えた。不思議に思ったカラ・カンが、最初の2人の妻に尋ねると、不満をもっていた2人の妻は真相を話した。怒ったカラ・カンは一族の者を集め、オグズを殺そうとした。妻の知らせで急を知ったオグズは、急いで味方の親族、従士、盟友を集め、兩軍は狩場で戦い、カラ・カンは傷を受けて死んだ。その後、75年間戦いが続き、最後にオグズが勝利して、タラス、サイラムからブハラにいたる國土を手に入れた。オグズに従わなかった一族の者は、東方へ移住した。オグズは王權を樹立し、黄金の天幕を張って大宴會を開き、彼に従った者に恩寵を施した<sup>16)</sup>。

この「オグズ・カン説話」は、『集史』第2巻「世界諸民族史」の「オグズ史」の冒頭にも、ほぼ同じ内容の話がやや簡略化されて記されている (Rashīd/Or.Add. 7628, fol.410b-411a; Ḥāfiz-i Abru/Bagdad Kōşkü 282, fol.590b-591a)<sup>17)</sup>。

16) 本田氏による全譯 (本田・小山 1973, pp.49-63) と北川氏による要約 (北川 1997, pp.401-405) があり、それらを参照して概略をまとめた。

17) Ḥāfiz-i Abru の *Majmū'a-yi Ḥāfiz-i Abru* には、『集史』第1巻「モンゴル史」第2巻「世界諸民族史」が収められている。Ḥāfiz-i Abru/Bagdad Kōşkü 282 は、

この説話の内容を考えると、トルコ族のイスラム化を象徴的に語った説話であるので、元來モンゴルとはまったく関係がない説話である。ところが、ラシードは、イスラム世界の諸民族の系譜に「モンゴル」を結びつけるために、この説話を導入し、説話のストーリーと遊牧諸部族の分類とを関連付けたのである。それが(史料12)～(史料17)であり、まとめると表2になる。

表2 オグズ・カン説話にもとづいたトルコ族(Turk)の分類の歴史的説明

[1a] オグズの子孫の24部族。トルコマンまたはオグズ族。(史料12)
[1b] オグズに協力した親族の子孫。最初すべてウイグルと呼ばれたが、ラシードの時代には、ウイグル、カンクリ、キプチャク、カルルク、カラチ、アガチェリの6部族に分かれていた。(史料13, 14)
[2] オグズに敵対した親族の子孫のうち、枝分かれの詳細が不明のもの。(史料15, 16) [a] ラシードの時代にはモンゴルと呼ばれているが、本来モンゴルではなかった部族(モンゴル部族以外のモンゴル系諸部族)。 [b] 上の[a]に類似している部族(モンゴルに似ている非モンゴル系諸部族)。
[3] オグズに敵対した親族の子孫のうち、エルグネ・クンの2人から枝分かれした本来のモンゴル。(史料17) [a] エルグネ・クンの2人からの子孫。 [b] 上の子孫のうち、アラン・コアの子孫。チングス・カンの一族。

(史料12) 「[1a] オグズ(Ughuz)の諸子から24の枝分かれが現れ、目次に詳細に記されたように、各々が固有の名称・通稱を得た。世界に存在するすべてのトルコマンたち(Turkmanan)は、これらの諸部族、すなわちオグズの24子の子孫である。トルコマン(Turkman)という語は昔はなかった。トルコ人の顔をしているすべての遊牧諸部族は、「純粋なトルコ(Turk)」と呼ばれ、各部族には固有の通稱が定められていた。オグズの諸部族が、自己の領域を出て、マールワーアンナフル地方とイランの地に入り、この地域において彼らの人口増加があったときに、水と大気の影響によって、彼らの顔かたちは次第にタジクの顔かたちに似るようになった。しかし、純粋なタジクではなかったので、タジク諸部族は彼らを「トルコマン」す

おそらくその原本であろうと言われている。ヤーンが、その「オグズ史」の部分を、Jahn 1969 にファクシミリとして附している。

なわち「トルコに似ている」と呼んだ。そのために、この名がオグズの諸分族・諸部族全體に適用され、その名で知られるようになったのである。」

『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zade1, pp.109-110)

(史料13)「[1b]オグズの兄弟たちと彼と同盟した何人かのいとこたち。ウイグル(Ūīghūr), カンクリ(Qānqlī), キプチャク(Qībjaq), カルルク(Qarlūq), カラチ(Qalaj), アガチェリ(Āghājērī)。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zade1, pp.81)

(史料14)「[1b]オグズと一緒にいて彼と同盟したトルコたち(Turkan)が、上述の諸部族[ウイグル, カンクリ, キプチャク, カルルク, カラチ, アガチェリ]である。最初, ウイグル(Ūīghūr)という名稱は、彼と同盟した諸部族全體を指したが、その後, 上に説明したように、彼らのうちのどの部族も各々異なる名稱によって別々になった。残りの者たちがウイグルの名稱により知られるようになった。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zade1, pp.109)

(史料15)「[2]オグズと同盟しなかったオグズの叔父であるオル・カン(Ūr Khān), コズ・カン(Kuz Khān), クル・カン(Kūr Khān)とオグズの兄弟たちと彼らの子孫たちの諸部族の枝分かれ。これらの部族は、2つの部分からなる。1つは、彼らの枝分かれの起源が、その古さのために詳細が分からないものであり、もう1つは詳しく知られているものである。」『集史』「トルコ・モンゴル諸部族史」(Rashīd/Alī-zade1, pp.81-82)

(史料16)「時代の古さのために、彼らの枝分かれの起源が詳しく分からない諸部族。

[2a]第1部 今日彼らをモンゴル(Mughūl)と呼んでいる諸部族。しかし、本来は彼らの名稱はモンゴルではない。なぜなら、この言葉は、彼らの時代より後につくられたからである。これらの諸部族のどの枝分かれも、人口が増え、各々が定まった名稱を持っている。

ジャライル(Jalāīr), スニト(Sunīt), タタル(Tatar), メルキト(Merkīt), クルルト(Kurlūt), トラス(Tulas), トマト(Tūmat), ブラガチン(Bulaghājīn), ケレムチン(Keremūjīn), ウラスト(Ūrāsūt), タムガリク

(Tamghaltq), タルグト(Targhut), オイラト(Ürrat), バルグト(Barghut), クリ(Qurt), テレングト(Telenkut), ケシュテミ(Keshutemr), ウリヤンカト(Üryanqat), クルカン(Qurqan), サカイト(Saqart)。

[2b] 第 2 部 草原居住者の諸部族であり、前述の最近名稱がモンゴルとなった諸部族に類似している。

このグループには、多くの部族と無数の分族がいた。その分族の中のいくつかの名稱と彼らの枝分かれが知られているものについては、(のちに)詳細に述べられ、彼らの状況の説明がなされるであろう。ケレイト(Kerart), ナイマン(Narman), オングト(Ünkut), タングト(Tankqut), ベクリン(Bekrtn), キルギズ(Qırqız) 『集史』 「トルコ・モンゴル諸部族史」 (Rashrd/Alı-zade1, pp. 82-83)

(史料17) 「[3] その枝分かれの起源がエルグネ・クン(Erkne Qun)に行った 2 人からであることが知られている諸部族。増殖により、彼らの一族が多くなり、モンゴル(Mughul)という言葉が彼らの種族の名稱になった。(モンゴルという名稱は)彼らに似ている他の諸部族にも認められ人々が口にしていく。(中略)

[a] 第 1 部 エルグネ・クンにいた本来のモンゴルの部族から生じた枝分かれ。各々が、特定の名稱と通稱を得て、そこから外に出た。

ネクズ(Nekuz), ウリヤンカト(Üryanqat), コンギラト(Qunqirat), イキラス(İkras), オルクヌト(Ülqunut), コルラス(Qurulas), イルジキン(İljkrtn), クンクリウト(Qunklrut), クブジン(Qubjrn), ウシン(Üshrn), スルドス(Suldus), イルドルキン(İldürkrtn), バヤウト(Bayaut), キンキト(Kırkit)。

[b] 第 2 部 ドブン・バヤン(Dubun Bayan)の妻のアラン・コア(Alan Qua)の 3 人の息子——彼らは彼女の夫の死後に生まれた——から枝分かれした諸族。ドブン・バヤンは、前述の本来のモンゴルからであった。アラン・コアはコルラス(Qurlas)族出身である。この諸族は、さらに 2 つの部分からなる。

ニルン(Nırın)。純粹であり、彼らは 16 の部族からなる。カタキン

(Qataqtın), サルジウト(Saljrıt), タイチウト(Tajjrıt), ハルタカン(Hartakan), スイジウト(Sıjrıt), チノス(Jınus)——ヌクズ(Nukuz)とも言われる, ノヤキン(Nıyaqtın), ウルト(Ürıt), マンクト(Mankqtı), ドルバン(Dürbän), バアリン(Bärın), バルラス(Barulas), ハダルキン(Hadarkın), ジュルヤト(Juryat), ブダト(Budat), ドクラト(Duqlat), イスト(İsut), スカン(Sukan), キンキヤト(Qınkqırat) ハルン(Harun)。彼らをキヤト(Qırat)と呼んでおり, 2つの部分からなる。純粋なキヤトは以下の如し。ユルクイン(Yurkıın), ジンクシウト(Jınkshırt), キヤト・ヤサル(Qırat Yasar)。キヤト・ボルジギン(Qırat Burjiqtın), すなわち灰色の目。彼らの枝はチングス・カンの父親から始まり, チングス・カン一族と彼の父親に關係付けられている。』『集史』『トルコ・モンゴル諸部族史』(Rashrd/Alı-zade1, pp. 83-88)

ラシードが説話のストーリーと遊牧諸部族の分類とを關連附けた結果, 「オグズ・カン説話」は, モンゴルの分岐を説明する説話へ變化したのであり, 遊牧諸部族全體が「トルコ」であり, その中に「モンゴル」が含まれていることが, 歴史的に矛盾なく説明できるようになっていることがわかる。

このようにして, 歴史的説明を伴う遊牧諸部族の分類體系が完成し, モンゴルはアダムから始まりヌーフ以後に分岐するイスラムの歴史體系の中に組み込まれたのである。しかし, そこで疑問に思われるのは, モンゴルが「トルコ」をイスラム化した英雄オグズに敗れた親族の子孫として組み込まれていることである。この点については, 次章で論じることにしたい。

## 5. イスラム化しなかったモンゴルとガザン・カンのイスラム化

『集史』において「トルコ」がモンゴルをも含む廣い範疇の人々を指す言葉として使われていることは, 單に「トルコ」という語の意味範疇の問題ではなく, モンゴルが「トルコ」の英雄オグズの親族から枝分かれしたとする『集史』の歴史觀と表裏一體の關係にあるのであり, それについては前章で明らかにした。しかし, そのように考えた場合, 疑問として残ることは, なぜラシー

ドは、自らの君主であるモンゴル族を、英雄オグズに敗れた者の子孫というマイナスのイメージを與えるような書き方をしたのであろうか。それも、『集史』冒頭の序文や目次につづく具体的な本文の最初という『集史』の中では非常に目立つ場所にそのように書いているのである。

その點を説明するために、まず『集史』第1巻「モンゴル史」の構成から見ていきたい。

### 〈『集史』「モンゴル史」の構成〉<sup>18)</sup>

#### 總序文・總目次

#### 第1巻 モンゴル史

序文、モンゴル史（ガザン史）が編纂された理由

#### 第1部 トルコ・モンゴル諸部族史

#### 第2部 モンゴル、トルコ、その他諸部族の帝王の諸本紀

#### 第1章 チンギス・カンの祖先

#### 第2章 チンギス・カンとその一族の歴史

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| (1) チンギス・カン紀  | (2) オゴテイ・カアン紀   |
| (3) ジョチ・カン紀   | (4) チャガタイ・カン紀   |
| (5) トルイ・カン紀   | (6) グユク・カン紀     |
| (7) モンケ・カアン紀  | (8) クビライ・カアン紀   |
| (9) テムル・カアン紀  | (10) フレグ・カン紀    |
| (11) アバガ・カン紀  | (12) スルタン・アフマド紀 |
| (13) アルゲン・カン紀 | (14) ガイハト・カン紀   |
| (15) ガザン・カン紀  |                 |

『集史』第1巻「モンゴル史」は、冒頭に「モンゴル史」の序文、「モンゴル史」編纂の理由があり、つづいて第1部「トルコ・モンゴル諸部族史」が始

<sup>18)</sup> Rashid/Rawshan, vol.1, 目次 pp.5-43 による。本田 1991, p. 571; 岩武 1998を参照した。なお、拙稿をまとめるまでの試行錯誤の期間に、故岩武昭男氏との議論の中で着想を得ることがあった。記して謝意を表するとともに、氏のご冥福をお祈りしたい。

まる。その中は、序文・目次、ヌーフからオグズまでの系譜、オグズ・カン説話、トルコ・モンゴル系諸部族の説明と續いていく。このように、「モンゴル史」の出だしは、序文を除けば、オグズ・カン説話が大きな比重を占めているといってよいだろう。それは、この説話がモンゴルの分岐を歴史的に説明する説話であるからであるが、それだけの理由ではないと思われる。なぜなら、この説話では、「トルコ」をイスラム化した英雄オグズに敗れた親族（叔父と兄弟と従兄弟）の子孫がモンゴルであると説明しているのであり、つまりモンゴルとはイスラム化しなかった「トルコ」であるとラシードは位置付けたのである。

この點に言及したものとして、ハンガリーの Mihály Dobrovits の指摘が重要である。Dobrovits は、(史料18)の『集史』の記事を根據に、モンゴル族はオグズによって東方へ追放された諸部族の子孫であるが、ラシードの時代に彼らも一神教徒（イスラム教徒）になったことをラシードは強調している、と指摘する<sup>19</sup>。

(史料18)「オグズ・カンと同盟しなかった何人かの叔父たち、兄弟たち、従兄弟たちは、東方へ移住した。彼らのもとでは、モンゴル人はすべて彼らの子孫であると確信されている。その当時、彼らはすべて異教徒であったが、時の経過とともに、彼らも一族とともに一神教徒になったのである。」(Rashid/Alr-zade1, p. 101)

確かに、ラシードは、第1巻「モンゴル史」の中でイルカン國のイスラム化について詳述し<sup>20</sup>、ガザン・カンがイスラムの君主であったことを強調している。第1巻「モンゴル史」の締めくくりを飾るのは、「ガザン・カン紀」であるが、そこで語られることは、即位する直前にムスリムとなったガザンが、イスラムの君主としていかに善政を行ったかということである。それを示す一例が、『集史』におけるガザン・カンの呼稱である。『集史』において、ガザンから見て傍系のイルカン（アフマド、ガイハトゥ、バイドゥ）は、「カン（Khan）」を名の後ろにつけずに呼び捨てにされ、直系のイルカン（フレグ、アバガ、アル

<sup>19</sup> Dobrovits 1994, p. 270.

<sup>20</sup> イルカン國のモンゴル族のイスラム改宗およびイスラム化については、本田 1969、坂本 1974、Melville 1990、北川 1999、岩武 2000を参照。

グン)は「フレグ・カン」のように名の後ろに「カン」をつけて呼ばれる。それに對して、ガザンだけは、「ガザン・カン紀」において、「イスラムの帝王 Padshah-i Islam」と呼ばれることが非常に多い。ガザンはこの稱號を用いたことで知られているが<sup>21)</sup>、『集史』「ガザン・カン紀」の後半は、この稱號のみでガザンを指すことが自明のこととして執筆されている。具體的に述べると、彼のイスラム改宗以前の記事では、ガザンは「ガザン Ghazan」「ガザン・カン Ghazan Khan」「皇子ガザン Shahzada Ghazan」と呼ばれるが<sup>22)</sup>、改宗以後から即位の時期の記事では、「ガザン・カン Ghazan Khan」「イスラムの帝王ガザン・カン Padshah-i Islam Ghazan Khan」「イスラムの帝王 Padshah-i Islam」などと呼ばれ「イスラムの帝王」という稱號が使われ始め<sup>23)</sup>、即位以後の記事においては、「イスラムの帝王 Padshah-i Islam」がガザン・カンの意味で繰り返し使われており、若干「イスラムの帝王ガザン・カン Padshah-i Islam Ghazan Khan」「スルタン・マフムード・ガザン Sulṭān Maḥmūd Ghazan」も使われている<sup>24)</sup>。一方、イルカン國の歴史書『選史』と『バナーカティー史』は『集史』を典據として書かれたと言われているが、そのガザン・カン紀の部分を見てみると<sup>25)</sup>、ほとんどの場合、ガザンも他のイルカンと同様、単に「ガザン・カン」と呼ばれているに過ぎない。比較すれば、『集史』においてガザン・カンを意味する「イスラムの帝王」が過度に使用されていることが明らかである。その理由を考えてみると、一つには他の2書と異なり『集史』がオルジェイト・カンに獻呈された歴史書であるため、父ガザン・カンを實名で呼ばずに敬意を表した稱號を使ったと考えられるかもしれない。その點では、『ワッサーフ史』も同じくオルジェイト・カンへ獻呈された歴史書であり、確かにその中ではガザン・カンを「イスラムの帝王」と呼ぶことがある (Waṣṣāf, pp. 398, 456)。しかし、『集史』に比べればその數はずっと少ないこ

(21) Melville 1990, pp. 171-172.

(22) Rashīd/Alī-zade3, pp. 246-294.

(23) Rashīd/Alī-zade3, pp. 294-302.

(24) Rashīd/Alī-zade3, pp. 302-571.

(25) 『選史』 Mustawfī/Browne, pp. 591-595; Mustawfī/Nawā'ī, pp. 602-606, 『バナーカティー史』 Banākātī/Ja'far Shī'ār, pp. 450-472.

とを考えると、それだけでは説明がつかない。むしろ、その稱號の意味どおりに、ラシードが、自分が仕えたガザン・カンを、イスラムの君主として強調するためであったと考えたい<sup>26</sup>。

以上のように考えるならば、第1巻「モンゴル史」は、モンゴルがイスラム化しなかった「トルコ」であることを説明する話から始まり、「イスラムの帝王」となったガザンが、イスラムの君主としていかに善政を行ったかを詳細に語る「ガザン・カン紀」で終わることになる。その構成に盛り込まれているのは、モンゴルは、オグズに敗れた親族の子孫でありイスラム化しなかった「トルコ」であるが、そのモンゴルは、偉大なガザン・カンのとき、カン自身がムスリムとなり、「イスラムの帝王」として諸改革を實行し、ついにモンゴルもイスラム化したのであるという筋書きであり、オグズによって始まった「トルコ」のイスラム化は、ガザン・カンによって一つの到達点に達したという論理である。異民族のモンゴル族を君主として戴くラシードにとって、自らの立場を正当化するためにも、ガザン・カンのイスラム改宗とイスラム君主として行った諸政策をより際立たせて書き記す必要があった。そのための一つの布石が、『集史』「モンゴル史」の冒頭への「オグズ・カン説話」の導入であったのである。

## ま と め

前章までの議論で明らかにしたことを、最後にまとめておきたい。

- (1) 東方イスラム世界の歴史家は、トルコとモンゴルが、異なる言語を話し、異なる文化をもつ別の集團であることは理解していたが、同じ遊牧民として何らかの関係があると考え、歴史家それぞれの見解にもとづいて両者を関係附けた。ラシードは、『集史』の中でモンゴルをトルコ的一种として

<sup>26</sup> ラシードはガザンを「イスラムの帝王」と呼ぶが、当時ラシードはスンナ派内シャーフイー派を代表する人物であり、反シニア派の立場に立っていたため、ラシードは『集史』の中で、サイイドを保護するなどシニア派よりの政策を行うガザンのシニア派傾向を隠蔽し、單にガザンのイスラムへの信仰のみを強調しているという岩武氏の指摘がある（岩武 1992, p. 61）。

位置付け、ハムドッラー・ムスタウフィーは、『選史』の中で両者を別々の始祖を持つ異なる集団として位置付け、共通の祖先から分岐したとみなした。

- (2) ラシードは、イスラム世界史の諸民族の系譜にモンゴルを位置付けるために、モンゴルはトルコの一つであるという立場をとり、『集史』第1巻「モンゴル史」では、モンゴルをトルコに結びつける方法として、従来のイスラム世界史の諸民族の系譜に登場するトルコの始祖トゥルクをはずし、かわりにトルコ族の英雄オグズが登場する「オグズ・カン説話」を導入した。
- (3) 「オグズ・カン説話」は、トルコ系遊牧民のイスラム化をテーマとし、本来モンゴルと関係ない説話であったが、ラシードは、その説話のストーリーと、自らが調査したトルコ・モンゴル系遊牧諸部族の分類を関連付けることにより、トルコの中にモンゴルが含まれることが矛盾なく説明できるような歴史をつくり出し、歴史的な説明を伴う遊牧諸部族の分類體系が完成した。
- (4) 『集史』第1巻「モンゴル史」において、モンゴルがオグズ・カンに敗れた者たちの子孫に位置付けられていることは、一見不可解なことである。しかし、「オグズ・カン説話」には、「モンゴル史」の最後を締めくくる「ガザン・カン紀」に記されたガザンのイスラム改宗とイスラム君主として行った諸政策を際立たせるための布石としての意味があるのであり、ラシードは、「モンゴル史」の最初に「オグズ・カン説話」を置くことにより、モンゴルはオグズに敗れイスラム化しなかったトルコであったが、ガザン・カンの時代に、ガザン自身がイスラムに改宗し「イスラムの帝王」として諸改革を行い、ついにモンゴルもイスラム化したのであるという筋書きを『集史』に盛り込んだのである。

#### 史料及び略号

Juwaynī/Qazwīnī = *The Ta'rikh-i-Jahān-Gusha of 'Ala'u'd-Dīn 'Aṣā Malik-i-Juwaynī*, ed. Mīrzā Muḥammad Qazwīnī, 3 vols., London-Leyden, 1912-37.

Jūzjānī/Ḥabībī = *Ṭabaqāt-i Naṣīrī*, ed. 'Abd al-Ḥayy Ḥabībī, 2 vols., Kabul

1342-1343/1963-1964.

Mustawfī/Nawā'ī = *Tārīkh-i Guzīda*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, Tehran, 1339/1960.

Mustawfī/Browne = *The Ta'rikh-i-Guzīda of Ḥamdu'llāh Mustawfī-i-Qazwīnī*, ed. Edward G. Browne, 2 vols., Leyden and London, 1910-1913.

Rashīd/Alī-zāde1 = Али-заде, *Фазлаллах Рашид ад-дин, Джамии ат-Таварих*, Том 1, Часть 1, Москва 1965.

Rashīd/Alī-zāde3 = Али-заде, *Фазлаллах Рашид ад-дин, Джамии ат-Таварих*, Том 3, Баку 1957.

Rashīd/Rawshan = *Jāmi' al-Tawārīkh*, ed. M. Rawshan & M. Mūsawī, 4vols., Tehran, 1373/1994.

Rashīd/Rewān köşkü 1518 = *Jāmi' al-Tawārīkh*, MS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Rewān köşkü 1518.

Rashīd/Or.Add. 7628 = *Jāmi' al-Tawārīkh*, MS. British Library, Or.Add. 7628.

Rashīd/Majlis 2294 = Kitābhāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Millī, MS. 2294. [足利惇氏・田村實造・恵谷俊之 1968所収].

Ḥafīz-i Abru/Bagdad Köşkü 282 = *Majmū'a-yi Ḥafīz-i Abru*. MS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Bagdad Köşkü 282.

Ṭabarī/Brinner = *The History of al-Ṭabarī*, translated and annotated by William M. Brinner, vol.II, New York 1987.

Waṣṣāf = *Tārīkh-i Waṣṣāf al-Ḥadrat dar Aḥwāl-i Salāṭīn-i Mughūl*, Tehran 1338/1959.

Ya'qubī = *Tārīkh al-Ya'qubī*, Bayrut 1960.

著者未詳/Bahār = *Mujmal al-Tawārīkh wa'l-Qiṣaṣ*, ed. Malik al-Shu'ara Bahār, Tehran 1318/1939.

## 参考文献

足利惇氏・田村實造・恵谷俊之 1968『イランの歴史と言語』京都：京都大學。

岩武昭男 1992「ガザン・ハンのダールルスイヤダ (dar al-siyada)」『東洋史研究』50-4, pp.48-82.

岩武昭男 1998「モンゴル期・ポスト=モンゴル期ペルシア語史書觀望」文部省科學研究費創成的基礎研究「イスラーム地域研究」の「史料學の可能性」研究會における口頭發表レジュメ (1998年12月19日京都大學羽田記念館)。

岩武昭男 2000「モンゴルのイスラーム文化の諸相」『關西學院史學』27, pp.71-100.

宇野伸浩 1994「シンポジウム報告：イスラームの歴史に組み込まれたモンゴル」『史滴』15, pp.61-65.

- 宇野伸浩 2002 『『集史』イラン國民議會圖書館寫本の欄外の加筆』松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝國・元朝の政治・經濟システムの基礎的研究（研究課題番號：12410096）平成12～13年度科學研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書（研究代表者松田孝一）』pp. 129-149.
- 長田夏樹 1952 「十二世紀に於ける蒙古語諸部族の言語——Mongolo-TurcicaII——」『東方學』5, pp. 42-55. 長田 2001, pp. 154-171 に「12世紀における蒙古語諸部族の言語——Mongolo-TurcicaII——」として再録。
- 長田夏樹 2001 『長田夏樹論述集（下）』ナカニシヤ出版。
- 北川誠一 1997 「モンゴルとイスラーム」杉山正明・北川誠一『大モンゴルの時代』（世界の歴史9），中央公論社，pp. 293-451.
- 北川誠一 1999 「イスラームとモンゴル」『イスラーム世界の發展』（岩波講座世界歴史第10巻），岩波書店，pp. 127-145.
- 坂本 勉 1970 「モンゴル帝國における必闌赤=bitikçi——憲宗メンクの時代までを中心として——」『史學』42-4, pp. 81-109.
- 坂本 勉 1974 「Ghazan khan のイスラーム改宗について」『トルコ民族とイスラーム』に関する共同研究報告』東京外國語大學アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 34-50.
- 志茂智子 1995 「ラシード・ウッディーンの『モンゴル史』——『集史』との関係について」『東洋學報』76-3・4, pp. 93-122.
- SHIMO Satoko 1996 "Ghazan Khan and the *Ta'rikh-i Ghazani*: Concerning its relationship to the "Mongol history" of the *Jami' al-Tawarikh*", *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* (Tokyo), 54, pp. 93-110.
- 志茂碩敏 1995 『モンゴル帝國史研究序説』東京大學出版會。
- 志茂碩敏 1997 「モンゴルとペルシア語史書——遊牧國家史研究の再検討——」『中央ユーラシアの統合』（岩波講座世界歴史第11巻），岩波書店，pp. 249-273.
- 白岩一彦 1993 「『集史』テヘラン寫本（イラン國民議會圖書館寫本2294番）について」『オリエント』36-1, pp. 55-70.
- 白岩一彦 1997 「歴史家ラシード・ウッディーンの生涯と著作（資料紹介）」『アジア資料通報』35-2, pp. 1-12.
- 白岩一彦 1998 「ラシード・ウッディーン『歴史集成』イラン國民議會圖書館寫本の成立年代について」『オリエント』40-2, pp. 85-102.
- 白岩一彦 2000 「ラシード・ウッディーン『歴史集成』現存寫本目録」『参考書誌研究』53, pp. 1-33+圖（卷頭 4p）。
- 杉山正明 1992 『大モンゴルの世界』（角川選書227）角川書店。
- 杉山正明 1997 『遊牧民から見た世界史』日本經濟新聞社。
- ドーソン, C./佐口透譯注 1968 『モンゴル帝國史1』（東洋文庫110），平凡社（原著：D'Ohsson, C. 1834, *Histoire des Mongols*, t.I, La Haye et Amsterdam）。

- 本田實信 1969 「イスラムとモンゴル」『西アジア世界』（岩波講座世界歴史第8巻中世2），岩波書店，pp.253-293；本田 1991，pp.197-232 に再録。
- 本田實信・小山皓一郎 1974 「オグズ＝カガン説話」『北方文化研究』7，pp.19-63.
- 本田實信 1991 『モンゴル時代史研究』東京大學出版會。
- 前嶋信次 1964 「ヤアクービー年代記中のチュルク族」内陸アジア史學會編『内陸アジア史論集』pp.67-94.
- 宮脇淳子 1990 「草原の覇者——モンゴル民族の形成と發展」護雅夫・岡田英弘編『中央ユーラシアの世界』（民族の世界史4）山川出版社，pp.271-324.
- 宮脇淳子 1995 『最後の遊牧帝國』（講談社選書メチエ41）講談社。
- 村上正二 1965 「モンゴル帝國成立以前における遊牧民諸部族について」『東洋史研究』23-4，pp.118-147.
- 村上正二 1972 『モンゴル秘史2——チンギス・カン物語——』（東洋文庫209），平凡社。
- 森安孝夫 2000 「ウイグル文字文化からモンゴル文字文化へ」日本モンゴル學會秋季大會口頭發表。
- 渡部良子 2001 「“終末”の徴から“傳説の帝王”へ——イスラム史の中のモンゴル」『しにか』12-11，pp.63-67.
- Dobrovits, Mihály, 1994, “The Turco-Mongolian Tradition of common Origin and the Historiography in fifteenth Century Central Asia”, *Acta Orientalia*, XLVII(3), pp.269-277.
- Jahn, K. 1969, *Die Geschichte der Oguzen des Rašid ad-Dīn*, Wien.
- Melville, C., 1990, “Padshah-i Islām: The Conversion of Sultan Maḥmūd Ghāzān Khān”, C. Melville ed., *History and Literature in Iran*, [Pembroke Papers 1], Cambridge, pp.159-177.

of those ennobled early in the eighteenth century, this also provides confirmation of the fact that the work was compiled in the early part of the eighteenth century. On the other hand, concerning the fact that one manuscript of the *Sira tuyuġi* has the same title as one of the works consulted in the compilation of the *Erdeni-yin tobċi*, it may be supposed that a later copyist familiar with the content of the *Erdeni-yin tobċi* reused it. Additionally, although the chronicles compiled in Inner Mongolia in the seventeenth century influenced the chronicles produced later in Outer Mongolia, it is also clear that, in the eighteenth century, chronicles compiled in Outer Mongolia influenced those from Inner Mongolia.

### THE SIGNIFICANCE OF “THE TALE OF OGHUZ KHAN” IN THE STRUCTURE OF THE *JĀMI‘AL-TAWĀRĪKH*

UNO Nobuhiro

This article makes clear several points, listed below, regarding the important meaning in terms of structure accorded “the Tale of Oghuz Khan” that appears at the start of “The History of the Mongols,” which occupies the first scroll of the *Jāmi‘al-Tawārīkh (Universal History/A Collection of Histories)* of Rashīd al-Dīn.

First, in order to situate the Mongols in the genealogy of the various peoples in Islamic world history, the Mongols were taken as a Turkic people, and as a method of linking the Turks and Mongols, the place of Turk, the ancestor of the Turks in traditional lineages of various peoples in Islamic world history was replaced with “The Tale of Oghuz,” in which Oghuz appears as the hero of the Turkish people, in the first scroll of “The History of the Mongols.”

Second, the theme of “The Tale of Oghuz” is the Islamization of the Turkish people, and although the tale originally had no relation to the Mongols, Rashīd managed to create a history that explained without contradiction the inclusion of the Mongols among the Turkic peoples through his examination of their genealogy that was worked into the narrative of the tale linking of the various Turkic and Mongolian nomadic peoples.

Third, in the first scroll, “The History of the Mongols,” the fact that Mongols have been categorized among those defeated by Oghuz Khan appears at first glance inexplicable. However, the significance of “The Tale of Oghuz Khan” is as a prelude highlighting the concluding “The Record of Ghazan Khan,” in which Ghazan’s conversion to Islam and the various policies of Ghazan Khan as Islamic

ruler are depicted.

By placing “The Tale of Oghuz Khan” at the beginning of “The History of the Mongols,” Rashīd worked the narrative of the Islamization of the Mongols into the *Universal History* by showing that the Mongols had been an unconverted Turkic people defeated by Oghuz, but that in the time of Ghazan Khan, Ghazan had himself converted to Islam and carried out various reforms as an Islamic emperor.